

カンボジアにおけるジェンダーと教育の現状 ホウン・ポーン（カンボジア）

今日、ジェンダーの不平等、すなわち、男女間で見られる不平等で不公平な処遇の差は、特に農村部における教育の面で顕著に見られます。実は、カンボジアでは、男性の数より女性の数が多いのですが、非識字率は男性より女性の方が高い数値になっており、また、就学率は、男性より女性の方が低い数値となっています。少女の就学率には上昇がみられるのですが（1998年から2002年の間で3%上昇）、ほとんどの場合、初等教育を修了しておらず、後期中等教育では、こうしたジェンダーギャップはさらに広がります。

教育を受ける機会に関する男女のこうした大きなギャップの原因として、息子と娘に対する親の伝統的な考え方が挙げられます。通常、親は、娘より息子を重視し、息子は外へ勉強しに行くことができるものの、娘は家にとどまり家事をこなさなければならないと考えます。さらに、結婚すると、夫に養ってもらうことになるので、娘は仕事などする必要はないと考えるのです。したがって、ほとんどの親は、娘に高等教育を受けさせても意味がないと思



カンボジアの子どもたち

っています。さらに昔は、教育を受けさせると、娘は頑固になるとも考えられていました。また、娘に教育を受けさせると、男性へのラブレターの書き方を覚えてしまい、そんなことになれば一族の恥となるので、これを避けるためにも、娘を学校に通わせるべきではないと考えるのです。反対に、息子は、ほとんどの場合、将来の稼ぎ手や一家の長となる存在です。ですから、息子が知識を身につければつけるほど、一家の名が上がると思います。その結果、一人しか学校に通わせる余裕がない貧しい家庭では、息子を通わせることになるのです。

もう一つの理由として、娘は家事や畑仕事の労働力とされている点が挙げられます。カンボジアの家庭のおよそ80%が農家であり、畑仕事を支える大量の労働力が欠かせません。というのもカンボジアの農家では、昔ながらの伝統的な農業がいまだに行われているからです。したがって、娘は自宅にとどまって家事をしたり、畑仕事をこなすべき存在であり、学校などに通っている場合ではない、と考えるのです。また、正規の教育を受けさせることはあまり重要ではない、と考える親もいます。こうした親は、娘の手に職を付けさせたり、町に出して縫製工場で働かせたいと考えます。

農村部の人びとは、娘を学校に通わせても意味はない、自分たちは貧しく、教育を受けても仕事を得られるわけでもない、と考えているようです。さらに、学校が遠いことも、女子の教育を受ける機会を妨げる要因の一つとなっています。学校の数が多い都市部では、こうしたことは大きな問題とはなりません、地方では、学校の数が非常に少なく、また、安全



学校設備の不足

面でも問題があります。そして、手洗いなどの公衆衛生施設が不足していることも、女子が学校に通わない原因の一つです。清潔なトイレが利用できない教育施設は、女子生徒にとって、居心地が良いところではありません。こうした場合、トイレに行きたくなったら、女子生徒は近くの森や大きな木の下に駆け込むしかないので、このため、設備が整った家の方が良いと感じるようになります。

カンボジアの女性の社会的地位におけるジェンダーの不平等は、非常に深刻な問題となっています。カンボジアでは、さまざまな制限があるヒエラルキー文化が深く根付いており、男性が重視される社会になっています。社会に認められる良い女性となるには、カンボジアでは、全ての社会ルールに従うことが求められます。この行動規範に逆らった女性は、家族、親戚、友人そしてよその家の人たちなどから、つまはじきにあいます。

要するに、カンボジアの人びとは、非常に保守的で、伝統を重視します。ジェンダー平等な社会を推進することは、こうした人びとの文化を変えることであり、この変化にはほとんどの人が強い反発を覚えます。

しかしながら、政府は、貧しい生徒に奨学金を支給するなど、教育分野に改革をもたらすべきです。さらに、清潔なトイレのある学校や寮を、地方にも建設すべきです。そうすれば、女子生徒が学校に通いやすくなり、出席率にも改善が見られるようになるでしょう。